

第1章 学院の歴史と建学の精神

沖縄キリスト教短期大学 草創期の歴史と建学の精神*

金城重明(第3代学長)

はじめに

沖縄キリスト教短期大学は、1957年4月9日沖縄キリスト教団(現在の日本キリスト教団沖縄教区)によって創設され、首里教会で各種学校沖縄キリスト教学院として呱呱の声を挙げた。同学院は成長発展を遂げ、1959年には琉球政府より沖縄キリスト教学院短期大学としての認可を受けた。尚1970年には沖縄キリスト教短期大学への名称の変更も生じた。沖縄キリスト教短期大学は、30年の風雪に耐えキリスト教を基盤にユニークな伝統を築き、今日の学風を形成して来た。本稿の目的は同短期大学の草創期の歴史と建学の精神について論述する事である。筆者は沖縄キリスト教学院の創設に関わった者の一人として、資料を用い体験を踏まえつつその歴史を取り扱い、建学の精神について論述したい。本稿は歴史の掘り起こし作業の第一歩にしか過ぎず、不備な点も多々あると思うが、同短期大学歴史編集の嚆矢としたい。

I 創設の背景

沖縄キリスト教短期大学は、沖縄戦の廃墟の中から、精神的支柱を喪失し希望を失った若者達に、キリストによって新しい生き方の原点を指し示し、沖縄再建の担い手として彼らを社会に送り出すべく、創設されたのである。従ってその創立の歴史的・精神的背景を考える場合、1) 沖縄戦、2) 敗戦による精神的支柱の喪失、3) キリスト教と沖縄再建、の3点が視野に入れられなければならない。之等の要素抜きには、同短大の存立の歴史的意義が充分には認識されないからである。

1. 沖縄戦

日本国土で唯一の地上戦となった沖縄戦は、

文字通り鉄の暴風として沖縄を舐め尽くし、甚大な人的及び物的被害を与えた。日米両軍含めて20万人余の尊い命が失われ、当時の人口の凡そ3分の1の県民が犠牲になったのである。

曾って「武器の無い平和の島」としてヨーロッパの征服者ナポレオンを驚かせたこの沖縄は、前古未曾有の惨劇を、去る大戦で日本軍の捨て石作戦にされる事によって体験せしめられた。

当時那覇市立商業学校の校長であった仲里朝章は、多くの学徒達を沖縄戦で失い、三女が『ひめゆり隊』で犠牲になり、自身は後頭部に敵弾を受けて負傷するという悲痛な体験をした。

沖縄戦が残した苛酷な爪痕は、住居や財産・文化財等の破壊焼失に止まらず、人々の心に消し去る事の出来ない深い傷痕を残し、虚脱感をも醸成したのである。

2. 精神的支柱の喪失

第2次大戦に於ける日本の敗北は、明治以来国民の精神的支配統合の原理であった皇民化思想を痛烈に打ちのめにした。そして天皇を神聖祝し我が国を神国日本として絶対化した独善主義の虚像は、暴露され崩壊せしめられたのである。

沖縄戦で倒れた若い学徒達は、一評論家から「動物的忠誠心」(大宅壮一)と椰揄される程、皇民化教育の最大の犠牲者となった。

差別の歴史を強いられた沖縄県民に取って、沖縄戦は死を以て皇民としてのアイデンティティを確立する契機と思われたのであるが、結果的にはアイデンティティの瓦解・生命の喪失以外の何物をも齎らさなかった。

後に沖縄キリスト教短期大学創設代表者と

なった仲里自身、戦前から教育者として国粋主義の枠組みの中で若者達を教育しなければならず、クリスチャンとしての矛盾を感じられたに違いない。

仲里は、敗戦後逸遠く捕虜収容所の宜野座で戦後初の男女共学の教育を始め、^{注(1)}やがて宜野座高等学校の初代校長に就任するが、或事情で学校を辞任して伝道者に献身するようになる。辞任に際して彼は次のように述懐している。「戦後の教育は目標を失い、教育勅語も地に落ちて顧みられず、私は教育家としての熱情を失ったので、辞職し、裸の伝道者としてもっぱら宣教のわざに精進することにした」。^{注(2)}これは曾っての教育勅語中心の皇民化教育に疑問を抱いていた仲里にとって、一つの大きな転機となったのである。

古き誤った思想の呪縛から解放された教育者仲里にとって、キリストに在る教育こそが人格を完成する真の教育だったのである。^{注(3)}沖縄戦と日本の敗北を体験し、目標喪失と虚脱感に打ち沈んだ人々の精神的空白を埋め得るものは、聖書の言葉以外にはない、との確信を仲里や当時のキリスト者達は抱いていたのである。

3. キリスト教と沖縄再建

日本は連合国に敗北し、沖縄は本土と切り離されてアメリカの軍政統治下に置かれるようになった。米軍の軍事支配下に置かれると言う事は、基地に伴う多くの複雑な問題を内包することを意味した。しかし占領当初米軍は、沖縄住民に、過去の悪しき政治権力と教育思想の呪縛からの解放者として好意的に迎えられた。

特に戦時中敵国の宗教であるキリスト教を信じ、異教徒として猜疑心と警戒心を以て見られたクリスチャンにとって、敗戦は精神的解放であった。鬼畜米英として憎悪と蔑視の対象とされた占領軍は、所謂キリスト教国の解放軍となったのである。

沖縄戦と言う償えない犠牲の上にはあるが、住民は世替わり、新しい時代の到来を喜び歓迎した。国敗れて山河無き戦禍のどん底から、沖縄の人々は新しい沖縄造り、沖縄再建の夢と希望を見出して行ったのである。

物質的渇きもさることながら、精神的渇きも強烈なものがった。従って戦勝国の宗教、世界宗教であるキリスト教に対する住民の関心の度合いは極めて高かった。従って戦禍を潜り抜けて来た多くの住民が、教会の門を叩いたのである。キャンディーが貰えるクリスマスは、子供達の楽しみの一つだった。

敗戦直後暫くはキリスト教ブームが続いた。日曜日やクリスマスには多くの住民が、違和感無しに教会に集まった。内的渇望や信仰の求道心を以て教会の門を潜る者、或いは新生活にプラスになるとの理由で教会に行く者、文化的・教養的に視野を広げてくれるキリスト教を求めて教会へ足を運ぶ者も少なからずいた。

大宜味朝徳(当時社会党主幹)は、『ゴスペル』1950年新春号に「琉球と宗教政策」と言う見出しで執筆をし、その中でマッカーサーの占領政策の中にキリスト教普及が入っている事を歓迎し、次のように述べている。

「日本と離れた琉球は世界の琉球として国際社会の仲間入りをしたのである。この際最も大切な事が、全琉球人が世界人としての自覚をもつことである。世界人として生きるには世界的宗教であるキリスト教精神に徹することが第一である」。^{注(4)}大宜味も党派的発想を越えて、新しい時代の宗教はキリスト教でなければならない、との認識を持っていたのである。

戦後の精神的混乱の中から、民衆が新しい生き方の座標軸をキリスト教に求めた状況の中で、教会は果たすべき使命の重要性を認識していた。キリスト教が新沖縄建設の精神的支柱にならなければならない、との認識が指導者や一般信徒の中に強く働いていたと思われる。

この様に住民が教会に目を向けた新時代の状況下で、教会が宣教論的教会論的に適切に対応出来たか否かについては批判もあろう。けれどもキリスト教精神によって若者達を教育し、教養、知識技術を身につけさせて沖縄再建の担い手として社会に送り出すと言う理念が、沖縄キリスト教短期大学創設者達の中にあっただと言う事は、見逃してはならない重要な点である。

II 沖縄キリスト教学院の誕生

小さな群れに過ぎなかった教会が、会堂建設と牧師養成と言う大きな課題を抱えながら、戦後精神的に疲弊し物質的にも困窮状態にあった住民に対して、色々な奉仕活動を行った。沖縄キリスト教会（沖縄キリスト教団の母胎）は総ての民間団体に先駆けて、戦災孤児の養護施設・幼児教育施設の設置、医療活動等に取り組み、仕える教会としての使命を果たして行く事に燃えていた。

1952年沖縄キリスト教会総会で理事長に選任された比嘉善雄は、『わたしの戦後秘話』の中で、当時の教会の取り組むべき課題について次のように述懐している。「理事長になって、第1に教会堂の建設と修復、第2に牧師の養成、第3に子どもたちの小さいときからキリストの教えに触れさせるために幼稚園あるいは保育所の開設、そのための保母の養成、この3つの目標の達成に努力しようと決意した」。^{注(5)}

沖縄キリスト教会の祈りと努力は、米国教会並びにキリスト者の協力援助を得て、教会堂建設、愛隣園及び相愛幼稚園の設立、移動病院の開設と言う形で結実した。教会がキリスト教学校の設立を構想し始めたのはその後の事である。

1. 聖書学校の構想から沖縄キリスト教学院の設立へ

沖縄キリスト教会（1957年に沖縄キリスト教団と改称）が、キリスト教学校の必要性を感じ、その設立を具体的に構想し始めたのは1956年のことである。しかしそれ以前に教会の組織化と宣教論の観点から、牧師伝道者の再養成機関の設立が要望されていた。従って沖縄キリスト教学院は、神学的訓練を受けた牧師が極めて少なかった戦後の教会の伝道者再養成機関の構想から発展して、今日の短期大学として発展的に結実したのである。

学校の設立委員会が幾度か開催されたのであるが、委員会名からも察せられるように、当初は聖書学校が構想されていたのである。

仲里の日誌によると、1956年4月17日に日本キリスト教団「岡田副議長からの音信」が記録されているが、その中に「聖書学校専任

教授の件実現努力」^{注(6)}とある。沖縄キリスト教会が既にキリスト教学校設立の為に、日本キリスト教団と連絡交渉を取り、専任教授派遣のことまで話し合いが進んでいたのである。派遣された人物は、後に教育・運営面で大きな貢献をする前田伊都子宣教師である。

尚1956年5月10日開かれた沖縄キリスト教団理事会の機構図の中に、聖書学校部が位置付けられ部員名が挙げられている。部長は最初善雄師と書かれてから消されているが、比嘉善雄が琉球政府駐日主席代表に決定した為であろう（5月16日発令）。委員はクライダー、比嘉盛仁、仲里朝章、松田定雄、金城重明にトールマンの6人である。^{注(7)}

教団の多くの課題を残したまま駐日主席代表に赴任した比嘉は、重たい気持ちで東京へ発ったであろう。氏は聖書学校の設立の件で、クライダー宣教師と共に青山学院の比屋根安定教授宅を訪問した。先輩から良い指導助言を受けたいとの切望からであった。しかし比屋根からは否定的な答えしか返って来ず、比嘉は失望した。これは学校経営の困難さを予想しての比屋根の発言であったと思われる。その時比嘉はクライダーに「信仰のためなら、困難でも神さまが力になってくれますよ。是非実現させましょう。」と言って励まし、更に「わたしは東京にいるので直接お手伝いできないが、よろしく頼みます」、と依頼している。^{注(8)}

9月の段階に入ると聖書学校の目標・教育内容案が基体化し、設立に向けて作業が推進されて行く。仲里理事長の日誌には次のように記録されている。

聖書学校

経費 \$2,000

前田伊都子姉（宣教師として派遣）

目標

- 1 夜学にする
- 2 クリスマン指導者養成、キリスト教伝道者養成

目的

本学は伝道者・指導者・開拓者の養成目的

にキリスト教神学の基礎知識並びに必要な
一般教養を授ける。

年限 2ヶ年 夜間開講 2,30 時間

1. 神学 英語講読 会話
2. 一般教養 歴史
1. 教義学 旧約神学 新約神学 教会史
2. 英語 会話 歴史 音楽

男女共学 高校卒業程度 年令は問はぬ

月謝 100 円

7時～9・5時 授業時間

定員 25 人

山城篤男氏委員に加入^{注(9)}

仲里の日記には岡田、武藤 8:29 9:3～4、柏井、佐治、島村、比屋根とメモされているので、既に日本キリスト教団の要人と会ったと思われる。^{注(10)}

この案で注目すべき点は、学校を聖書学校とし、高校卒業後2ヶ年の課程と定め、夜間教育をすると言う構想である。伝道者、クリスチャン・リーダーの養成と言う当初の狙いが明確に打ち出されている点も特徴的だが、開拓者養成は仲里のユニークな構想である。伝道者、クリスチャン指導者の養成が主眼だったので夜学が適切だと判断された。

聖書学校から発展的にキリスト教大学の具体案が出て来るのは、11月6日の教役者・理事会に於いてである。議案8が「キリスト教大学の設立」で、議案10は「学校設立委員－比嘉盛仁、金城重明、松田定雄、クライダー、トールマン、ナティピガード、山城篤男、新垣良康、比嘉良夫」となっている。^{注(11)}仲里の日記に「高級のキリスト教学校」とのメモがあるのも興味深い。^{注(12)}

アメリカのディサイプルス・オヴ・クライスト教会から宣教師として派遣された前田伊都子が、1957年1月に着任する。氏が学校設立委員として加えられる事によって、委員会が強化され、4月の開校まで頻りに開催された。

2月6日の学校設立委員会は次のような新しい案を提出している。

1. スタートすること
2. 4月

- \$ 200 図書
- 50 事務
- 100 電気
- 1,000 教師
- 1,200 "
- 1,000 雑費
- 1,000 寄付並月謝(収入)☆

3. 募集 30 人
4. 2年制度
5. 認可届の件
6. 名称：沖縄キリスト教短期大学
7. 校舎
8. 目的
9. 昼間部
10. 学科科目の立案(前田、金城、松田)
11. 専任教師：前田伊都子姉、金城、松田、比嘉(良夫)☆、クライダー、トールマン

12.開校 4月^{注(13)}

本案が翌7日の理事会に提出され、『学校設立を承認する件』の議案で、沖縄キリスト教団短期大学設立が承認される。^{注(14)}先回の案と大きく異なるところは、教団立短期大学としての明確な性格づけがなされ、夜間部から昼間部に変更されたと言う点である。名称・目的は更に練り直されて行く。

学校設立委員会が2月中旬から3月にかけて3回程開かれている。2月18日の委員会では、琉球政府との設立に関する折衝には玉城弘英が当たること、開校に関する事務分担・広告宣伝、校長の人選、教授並びに講師人事、事務局・財務会計人事及び入学選考方法など詳細な具体案が検討された。^{注(15)}特に3月18日の委員会はアメリカ・メソジスト教会のI.B.C. 代表T. T. ブランポー牧師を囲んで開かれたが、派遣教授の件が話題の中心だった。^{注(16)}

沖縄キリスト教団は、不安定要素を残しつつしかし主に望みを託して、沖縄キリスト教学院を1957年4月9日首里教会の中に誕生させたのである。初代院長には仲里朝章が就任した。大きな歴史的船出である。

自らを支える力も充分に無い教会が、学校を設立すると言うことは無謀とも思える。しかし伝道の書3章1節に「すべてのわざには時がある。」と記されているように、学校設立

も時だったと思うのである。神への信頼がこの業を着手せしめたのである。

日本のキリスト教学校の殆どは、外国ミッション団体の働きでミッション・スクールとして設立された。しかし沖縄キリスト教学院は、教会立学校として誕生したのである。勿論アメリカの教会・兄弟姉妹の大きな援助協力があった事は忘れられてはならない。沖縄キリスト教学院は、ミッション・スクールではないが、大きなミッシオ・デイ(MISSIO DEI)を担っている学校なのである。

沖縄キリスト教学院は、最初『沖縄基督教学院』の設立認可申請書を、代表者 仲里朝章名で中央教育委員会に提出したが、認可された各種学校は片仮名の『沖縄キリスト教学院』であったとのハプニングも起きた。そこで生じた厄介な法的事後処理を、下里恵良弁護士に付託し、新たに『沖縄キリスト教学院』設立認可申請書を提出して認可されると言う経緯もあったのである。結果的には読み易い片仮名の「沖縄キリスト教学院」として法的に認知された訳である。怪我の巧妙と言うべきであろう。しかし同学院が琉球政府中央教育委員会によって正式に認可されたのは、11月12日の事である。^{注(17)}

開校を前に漢字の「沖縄基督教学院生徒募集要項」も出来上がり、広告宣伝や発送も行われ、第一期生獲得に乗り出した。勿論本学院に最大の関心と期待を寄せたのは諸教会であり、教会の若者達であった。

3月25日受験者34名に面接試験が行われ、その日に26名(男子14名、女子12名)の合格者が決定されたのである。合格者の凡そ3分の2は新卒だった。^{注(18)} 因みに開校当初の学生募集要項は次の通りであった。

『沖縄基督教学院生徒募集要項』

設立の理由……曾て太平洋の孤児と呼ばれた沖縄が国際的な島として政治経済文化あらゆる面で一大変化をなしつつあることは実に不思議な摂理であります。しかし複雑にして矛盾の多い現在の沖縄を国際的平和の島にするには是非ともキリスト教文化が基礎をなさねばならぬことは世界史の教ふる真理でありま

す。

そこでわれらは新しい沖縄の建設に直面してキリスト教精神を身につけた人材の養成が緊要であることを確信してこの学校の設立を計画しました。

尚、学制の編成は凡そ日本における短期大学の制度をとりました。

目 的……本学院はキリスト教の精神に基づいて広く一般学術を修得し、更にキリスト教の専門的知識を究め個人の人格完成並に社会に有用なる人物を養成することを目的とする。

募集人員……30名

入学資格……新制高校卒又はこれと同等以上の学力を有する者。
基督教信者に限らず。

出願期間……3月10日(日)までに郵送又は持参の事。

提出書類……入学願書、調査書

提出先……那覇市久米町 沖縄基督教団那覇中央教会、又は那覇市首里当蔵区4-1、沖縄基督教団首里教会

入学者決定……出願者には本学院より書面をもって日・時・場所を通知し面接試験を行い合格を決定する。

学 費……月200円(授業料その他一切を含む)

学科目は次の通り定める。

人文科学

国文学、哲学概論、論理学、宗教学、音楽、体育

社会科学

教育学、歴史学、心理学、経済学、法律論、生物学、栄養学

自然科学

自然科学概論、生物学、栄養学

外国語

英語講読、文法。作文、リーディング、会話、英文タイプ、第二外国語(選択) —・ギリシャ語、フランス語

基督教に関する専門科目

旧約聖書、新約聖書、基督教神学、教会史、

宗教教育、実践神学

教授

学院長 沖縄基督教団理事長 首里教会牧
師経済学士・文学士 仲里朝章

教授 沖縄基督教団宣教師 M.R.E. 前田伊都子

教授 " A.B.・S.T.B. W-W・クライダー

" " B.A.・L.E トールマン

教授 外2名 目下日本に交渉中

専任講師 沖縄基督教団那覇中央教会牧師
神学士 比嘉盛仁

" 糸満教会牧師 文学士 金城重明

" 兼次教会牧師 文学士 松田定雄

兼任講師 琉大助教授 理学士・工学士
比嘉良夫

" 琉大教授 小橋川寛

" 琉大助教授 教育学修士

安谷屋良子

" 琉大講師 B.A. 東江康治

" 琉大助教授 M.A. 小橋川慧

3月25日に面接試験を受けて合格した者は
26名であったが、定員割れで追加合格者も出
た。合格者の氏名は次の通りである。

名嘉真和子、伊志嶺典子、佐渡山英子、渡嘉
敷正雄、宮里英徳、知念トミ子、砂川富子、
安次嶺康明、津嘉山淳昇、糸満朝盛、徳山和
茂、仲本君子、平良敏子、仲吉恵久、富村尚子、
瀬嵩政一郎、赤嶺鶴子、翁長良光、宮城俊幸、
安室悦子、真喜志康隆、平川宗男、大城エミ子、
亀島義昇、宮里満喜子、座間味宗治、与儀久子、
宮里文子、中村節子

4月9日午前10時から新しい希望に満ちた
25名の第一期生を迎えて、開校式が首里教会
の礼拝堂で厳粛に挙行された。式には琉球大
学の安里源秀学長、仲宗根政善副学長、ディ
フェンダーファー民政府教育部長その他各界
の来賓が出席して、新入生と新しい学院の門
出を祝福した。沖縄タイムス、琉球新報の両
新聞は当日の夕刊に、ユニークな沖縄キリス
ト教院誕生の記事を掲載した。

沖縄タイムスは、沖縄キリスト教院の設
立の趣旨等について次のように説明してい
る。「同学院は新しい沖縄の建設にキリス

ト教の精神を身につけた人材を養成し、社会に
送り出そうという意図の下に設立されたもの
で学制の編成は日本の短期大学と同じで、新
入生に対しては毎週火曜日から金曜日までの4
日間午前8時半から5時半まで2ヶ年間修学さ
せることになっている。」^{註(19)}この様にマスコミを
通して、沖縄キリスト教院の設立と理念及
びその社会的役割とが報道されたのである。

2. 仮校舎時代

沖縄キリスト学院は校舎など造れる状況に
はなく、首里教会を仮校舎としてスタートし
た。仮住まいと言え、常識では肩身の狭い
思いで生活を強いられることを意味する。し
かしキリスト教精神で若者達を教育しようと
している同学院にとって、教会で呱呱の声を
挙げ、教会で初期の教育活動を営んだと言
うことは極めて深い意味を持っていたのである。

キリスト教教育の基本である礼拝は毎日行
われた。教育の場が教会であり、礼拝の場が
学舎であった。こうして密度の濃いキリス
ト教的人格教育がなされたのである。

礼拝は毎日行われ、学生及び教職員全員が
参加した。出席の義務づけも強制も無く、当
然のこととして全学生が礼拝に参加して、神
を讃美し熱心に説教に耳を傾げた。講壇には
牧師だけでなく信徒も交替で立った。学生に
も時々順番が回って来た。従って聖書の講解
だけでなく色々な証や体験が聞けた。学生達
は礼拝で魂が養われて行ったのである。2箇年
のキリスト教教育を受けた後、殆どの学生が
洗礼を受けて卒業すると言う年度もあった。

首里教会の礼拝堂は、礼拝の場であると共
に、講義・講演会の場でもあり、更には入学
卒業の式典の場であり、時にはスポーツの場
でもあった。教会のオルガンは礼拝の為だけ
でなく、学生の練習用楽器としても大いに用
いられた。

沖縄キリスト教院は、火曜日から金曜日
までの週4日制の学校で、ゆとりのある時間
割編成がなされていた。月曜日を休日にした
理由は、主日礼拝と奉仕の日曜日の翌日だっ
たからである。学生達も日曜日には教会学校
で教えたり、教会青年としてその他の奉仕に
も積極的に参与した。従って長いキリスト教

の歴史的背景を持つ欧米社会のように、沖縄キリスト教学院は土曜日は伝統的に休日だったのである。授業を土曜日に行うようになったのは、非常勤の時間的都合や科目数の増・教室の不足などの理由から、5日制で時間割編成が不可能になった為である。

沖縄キリスト教学院は数少の教員組織で始められた小さな学校であったが、仲里院長の個人的関係や首里と言う地の利を得て琉球大学から多くの専門分野の教授達を非常勤に迎える事が出来た。募集要項に出ている非常勤の外に、呉屋朝章、外間政章、照屋彰義各教授等の顔触れも見えた。

開校当初から専任教員の増員が考えられていたが、明治大学大学院で国際法を専攻した新進気鋭の西俣昭雄（現在亜細亜大学教授）を迎える事によって教学が強化されて行った。西俣は首里・真和志両教会での奉仕、S.C.Mの読書会指導などにも当たった。^{注(20)}

1958年新春に関西学院大学松村克己教授を哲学の集中講義の為に招聘した。同氏の名講義は学生に感銘と大きな知的刺激を与えた。哲学のテキストは三木清の『人生論ノート』で、学生だけでなく教職員も共に聴講した。松村教授の招聘は草創期の沖縄キリスト教学院にとって、アカデミックの観点からも歴史的イベントとなった。その後も2箇年に一度は集中講義に招くことにしたのである。同氏は学院のみならず、教会での説教・講演、大学高校での講演など多忙なスケジュールを熟された。^{注(21)}

言うまでもなく首里教会での仮校舎時代は、施設設備の不足は厳しかった。特に体育実技の時間は学生に不自由を与えた。不自由な中で学生達の指導に当たったのが小橋川教授である。図書室も事務室も実に小さなものだった。しかし首里教会は、沖縄キリスト教学院創設の為に暖かい配慮をしてくれた。特に教室の為に旧礼拝堂（当時の教会学校教室）を二つに仕切って教室として提供した。

“SMALL IS BEAUTIFUL”と言おうか、小さな学院共同体の中で大きな人格的触れ合いがあった。特に学生達が仲里学院長宅に伺って、食事をしながら歓談の時を与えられたことは、彼らが学院長との親しい交わりの体験

をしただけでなく、人間としての生き方にも大きな影響を及ぼしたものと思われる。

Ⅲ 沖縄キリスト教学院短期大学への昇格

開校当初からキリスト教大学の夢のあった沖縄キリスト教学院が、各種学校から短期大学に昇格したのは2年後である。当時私立学校を経営出来る法的人格は財団法人であった。財団法人沖縄キリスト（基督）教学院は1959年1月22日付で、「沖縄キリスト（基督）教学院短期大学設置認可申請書」を必要書類を添えて中央教育委員会宛に提出した。^{注(22)}中央教育委員会は3月3日付で同短期大学設置の認可をしたのである。学院から短期大学への昇格は、社会的ステータスから言っても大きな成長発展である。筆者がアメリカ留学中にこの事は実現した。

短大の設置要項は次の通りになっている。

第一 沖縄キリスト教学院短期大学設置要項

1 目的及び使命

戦後沖縄の特殊的地位は、社会的にも複雑化し、多くの矛盾を生じ易い状態にあります。この間教育に就いては、軍民両政府の施策に宜しきを得て、着々設備並びに内容共に充実発展を見ていることは、感謝に堪えません。

吾々は、この特殊事情におかれた沖縄の真の平和を祈求する所からキリスト教精神文化を基礎とする教育の必要なることを痛感し、夙に同志と謀り、キリスト教精神を身につけた人材の養成を目的として57年4月以来、学院を開設して来ましたが、今度短期大学制定に準拠して短大の認可を受ける為更に内容を整備してこの設立認可を申請するものであります。

尚、本学院は、各種学校として認可を57年度に受けています。

2 名称

財団法人沖縄キリスト教学院短期大学

3 位置

那覇市首里当蔵町2丁目18番地

4 校地

総坪数	2,663坪
現在地	323坪
予定地	2,340坪

5	校舎等建物	
	総坪数	329坪
	現在坪数	94坪
	予定坪数	235坪
6	図書施設概要	
	総数	868冊
7	学科	
	キリスト教学科一	
8	学科目概要	
	1. 一般教育科目	15科目 30単位
	2. 外国語科目	3科目 10単位
	3. 体育科目	2科目 2単位
	4. 専門科目	15科目 45単位
9	履修方法概要	
	2カ年以上在学し、62単位以上履修した者には卒業証書が授与される。	
10	職員組織概要	
	学長	1名
	教授	4名
	講師	13名
	その他職員	2名
11	学生定員	
	1学年	30名
	2学年	30名
	計	60名
12	設置者	
	理事長	仲里 朝章
	副理事長	前田 伊都子
	理事	W.W. クライダー
	"	比嘉 盛仁
	"	松田 定雄
	"	小橋川 寛
	"	川平 清
	"	外間 政章
	"	親泊 正博
	"	喜屋武 信栄 ^{注(23)}

沖縄キリスト教学院短期大学は学院時代からキリスト教の専門科目を設けてキリスト教教育に重点を置いて来たが、短期大学への昇格と共にキリスト教学科を設置し、形式・内容において充実されて行った。外国語教育には当初から力を入れ、2ヶ年で8単位が必修とされた。

同時に学生が短期大学の学生としての身分

が位置付けられたと言うことは、彼らにとって社会的ステータスの観点からも意義深いことであった。とは言え校舎が仮住まいの状態では、沖縄キリスト教学院短期大学の存在は一般には余り知られない状況にあった。施設設備の充実強化は当然のことながら、学生からも校舎建設の強い要望が出て来るようになった。

学生新聞を読むと、大学としての認可を受けたからには校舎があって然るべきではないのか、と言った強烈な要求と不満が生々しくぶつつけられている事がよく分かる。学生の個人的意見には次のようなものがある。「校舎はその学校の象徴である。未だ自分の校舎を持ち得ないという事は学生にとっては、この学院がまだ社会的に認識されていない以上にショックである」(学生T)。「私達は早く自分の家が欲しい。学校はどこに在るのかと問われた時、自然に返答が渋る。校舎の所在地がはっきりすれば、社会も認識してくれるだろうし、私達も安心して勉強できる。社会に余り認識されない学校ってどうかと思う」(学生K)。これは学生の切実な要求である。

更に、第4期学生会総会は「……学院当局は学生に対し、あるいは色々な面において無責任な所があるという点が強く、先ず教員免許の問題に焦点がしばられ、募集要項の上での約束と現在とは非常に違いがあることを指摘、大多数の学生がこれを不満としていた。次に校舎建設促進の問題が出、『大学としての組織をもち認可をもつならば校舎という外形的なものがあるべきだ』と言う基本線に立ち、その促進要請を決議した」^{注(24)}との強い意見要望を提示したのである。

これは筆者がアメリカ留学から帰り、学科主任の責任を負わされた年にぶつかった大きな課題であった。筆者も帰沖して分かった事であるが、教員免許問題とは、学生達が教職科目を取れば社会科の教員免許(中学2級)が取得出来ると思って入学したのに、社会科ではなく宗教科ではないか、しかも沖縄にはキリスト教学校(中学)が無い為教育実習が出来ないので宗教科の免許取得も難しいとは無責任ではないか、と言う訳である。これは1960年度『学生募集要項』に、「教職科目を

修得した者は中学校社会科の免許状を得ることが出来る」、^{注(25)}と明記した点に原因があった。このように学生達の意見不満の理由は明確である。学生達が明確な主体制を持って学校に問題提起をした事は、教学の改善にプラスになったのである。1961学年度からは中学校の『宗教科』の外に、『英語科』の免許状が与えられるようにカリキュラムの改善がなされた。学生募集要項にもその様に明示し、宗教の専門科目の外に英語の専門科目が設置された。因みに最初の英語教育実習生を首里中学校に送り、実習担当の任に当たったのが筆者であった。英語科が設置される前の事である。

教学内容の充実強化は施設設備の充実と相俟って成されなければならない。オールター・クライダーの強力な働きによって、米国 I. B. C. 関係教会からの援助の明るい見通しがついた。しかし予定より遅れる状況が生じたのである。学生達にとっては、その遅れは不満だった。筆者は校舎建設の遅れについての学生達の質問に対して次のような答弁をしている。「校舎建設予算は、米本部のメソジスト、ディサイプルス、福音改革派の各教会各1万ドルの献金募集の約束がされている。ところが、ディサイプルスと福音改革派は何時でも出せるが、メソジストがその予算を61年度に組んだ為どうしても今年中には無理だ。しかし、来年中には必ず建設されるだろう」。^{注(26)} 前田宣教師は1年の休暇を終えて1961年10月には再赴任するが、その時から校舎建築の実現の為に全力投球をして行った。11月には校舎建設委員会が発足し、仲里学長、前田、クライダーと理事達が、校舎建築の具体的プランの検討に入り、ブループリントの作成が進められた。『沖縄キリスト教学院短期大学新聞』は「いよいよ着工か、2階建ての建坪150坪」「新校舎待たれる上ノ毛」と言う見出しで、校舎建設の記事を大きく取り挙げている。「総工費4万弗(建物2万5千弗、内工費1万5千弗)規模、2階建の約150坪」。更に1,2階の詳細な内部説明までなされている。そしてブループリントはクリスマス前後に渡米するクライダー宣教師を通してニューヨークのI.B.C.事務所に送られる事になった。^{注(27)}

こうして1961年は、学生教職員並びに関係者一同が大きな夢と希望に胸を膨らませる年となり、特にクリスマスは恵みの降誕祭となった。

1962年は、我々が具体的目標と希望とをもって校舎建築募金活動に精力的に動いた年である。海外の教会から贈られる3万弗の10分の1に相当する3千弗目標の募金運動を展開した。その為に教団の諸教会を回った。教会は自分達の学校の発展を喜び、積極的に協力してくれた。3千弗のお金は備品購入に充てられたが、当時の貧しい教会に取っては大きな額であった。

その様な活気に溢れた状況の中で、沖縄キリスト教学院短期大学は本県初の保母養成機関を設置したのである。沖縄キリスト教学院短期大学は、琉球政府の要請に応じて、1962年4月に『附設保母養成課程』を設置し、翌63年3月には英語科及び児童福祉科(後の保育科)の設置が認可された。^{注(28)} 沖縄の諸大学の中で最も小さな同短期大学が保母養成機関を設置したと言う事は深い意味を持っているのである。

当時の厚生局民生課の渡真利源吉(現在愛隣園園長)は、『沖縄キリスト教学院短期大学季報』(学生新聞)に「児童福祉科設置—その意義と使命」、と言う見出しで懇切に児童福祉科設立の意義と役割について論じている。

同氏の論旨は凡そ次のようなものである。沖縄の児童福祉施設は戦災孤児の養護施設として出発した。1950年代に入り『児童福祉法』が制定され、児童福祉に対する考え方は、従来の応急的児童保護対策から、児童の福祉を積極的に増進する為の児童福祉対策へと変化した。また『児童福祉施設最低基準規則』(1954)が制定され、同施設で児童の保護指導に従事する職員の資格要件も定められた。

その中で保母は保母資格試験にパスすればその資格が与えられるが、ただ専門的知識技術だけでは不十分である。「その人が真にこの道の仕事に従事する者としての社会的使命感に燃え、人間を取り扱う者としての教養の豊かさ、保育に関する理論や技術のわか仕込みでなくて、相当の期間、訓練や教育を受けさせる必要がある」。

更に渡真利は、「この社会的要求に応えるために、諸者の間では、沖縄においても保母を養成する学校または施設が必要だとの声が高まり、政府は、1961年、児童福祉法施行規則第50条の規定に基づき、保母を養成する学校または施設における必修科目及び授業時間数等に関する告示をなし、同時に沖縄にある諸大学に対してその設置方について働きかけた。幸いにもこの社会的要請に応えるために、本学院の理事会が奔走され、1962年本学院内に現在の児童福祉科が設けられたのであるが、当科が、沖縄における児童の養護や保育に従事する職員の唯一の専門的な養成機関として、然もその最初のものとして発足したことは、誠に意義深く、このことは、沖縄の児童福祉事業史の上において特筆されるべき事柄であると思うのである」、^{注(29)}と短期大学に於ける児童福祉科の位置付けの意味を強調している。

児童福祉科の設立の為に奔走し、その働きの中心的役割を担ったのは前田伊都子宣教師であった。前田は学校の運営面だけでなく、児童福祉科の初代科長の役割をも果たした。児童福祉科は後に現在の保育科に名称が改められるが(1967年4月)、名称変更は保育科の成長発展の軌跡を物語っているのである。

保育科が手探りの状態から始められたのに対して、英語科の設置には余り大きな苦勞はなかった。英語・児童福祉両科が設置認可をされた時、前田は次のような談話を述べている。「児童福祉科の設置は……専門分野に於ける学的水準を高めると共に、その知識を実地に活用できるように訓練し、真に『愛と奉仕』の精神をもって施設に働く婦人を養成したい。

英語科は、沖縄という特殊環境においては、英語教育の重要性は強調しすぎることはない。この英語教育を通して、国際的教養と民主主義社会人としての良識を有しキリスト教精神をもって社会に働く良心的な人材を養成するために英語科も設置したが、英語科の学生のみでなく、他の科の学生に対しても英語教育は力を入れる方針である」。^{注(30)}

教育に基礎からの積み上げ作業が必要であるのは、恰も建物の建築が基礎工事から堅実に運ばなければならないのと同様である。

校舎建築も多くのキリスト者達の祈りと奉仕によって、土台から少しずつ積み上げられて行った。

沖縄キリスト教短期大学の現在の校地は、元来沖縄キリスト教団が大学生の活動研修の場として造られた『キリスト教学生センター』用地として入手したものである。当初教団は、チャプレン・カースチンの働きを通して捧げられた献金で、当蔵町2丁目6番地に約1千坪の土地を購入していた。琉球大学がグラウンド造成の為にその土地の譲渡を強力に願い出た。比嘉理事長の所へ小橋川寛教授や、安里学長、仲宗根副学長まで日参し、結局琉大の土地であった現校地と交換するとの条件で手放したのである。^{注(31)}

通称キリ短坂の右下にある72段のコンクリート階段は、米軍で水道関係の技師をしていた一人のシヴィリアンの献金で構築されたもので、沖縄キリスト教学院短期大学新校舎の基礎工事の第一歩だったと言える。^{注(32)}この様に多くのキリスト者・有志の善意によって同短期大学は築き上げられて行ったのである。

首里の人々が大学が立つとは夢想だに思わなかった上の毛(通称)に、沖縄キリスト教学院短期大学新校舎が建てられたのである。環境がすっかり変えられた。校舎はクリーム色の明るい建物で、高台にあるのでホテルと見違える人達もいた。

学校関係者は言うに及ばず、沖縄キリスト教団の牧師・信徒達も自分達の大学が出来た事を喜んだ。教団機関誌「道しるべ」は、「キリスト教学院校舎落成す」と言う大きな見出しと写真入りで、新校舎の完成を特集した。

解説文は、新校舎が出来た当時の関係者の心境を次のように説明している。「沖縄キリスト教学院短期大学の新校舎が遂に完成した。誰が、この景勝の地に、こんなにも早く、この偉業を想像し得ただろうか。……遂に難事中の至難事である校舎建設を成し遂げ得たことの裡に、私達は支え導き給う神の御手を覚え居れない。建設の推進力となった元沖縄キリスト教団宣教師W. クライダー氏が「神様の業ですよ」と云われたこの短い一言に、

私達は限りない共感を覚えたのである。

しかし、これは神の業への参加を許されて働いた人の業でもある。OKIBの絶大な支持と、クライダー氏の推進、教団全信徒の祈り深い献金及び多くの支持者の協力がなければ、この業は決して成功しなかったであろう。神人協力の偉業とはこのことを云う。^{注(33)}

こうして沖縄キリスト教短期大学は、教団の諸教会及び米国の教会、多くのキリスト者協力者の祈りと献金と奉仕とによって、生み出され着実な成長を遂げたのである。殊にその設立と基礎造りの段階で顕著な貢献をした3人の創設者仲里朝章、ウォールター・クライダー、前田伊都子の名前は特筆されるべきである。

仲里朝章学院長は教育者として最も重要な理念的側面から、沖縄キリスト教短期大学の創立を担った人物である。敗戦直後仲里は教育勅語による国粋主義教育への躓きと挫折を経験した。彼はその心境を次のように述懐している。「戦前の皇国の道も廃れ教育勅語の威力失へる時代 教育の目標を何辺に措くか全く混沌状況に陥れり」。^{注(34)} 教育者としてのこの様な苦悩の中から、新しい教育の原点・目標を聖書に見出したのである。ここで注目すべき点は、仲里の考えたキリスト教教育の理念は単にキリスト教的知識教養を授ける、と言うようなものではなく、キリストに在る人間教育と言う事であった。仲里は次のように述べている。「吾人の目標はキリスト教大学に非ず、『キリスト大学』活けるキリストに直接教育さるる大学を云ふ也 決してキリスト教の知識を得る大学には非ざるなり キリストの私塾といふも可なり キリストの大学といふも可なり キリストによりて其感化を直接受けて人格を建造して行くキリストの教育薫陶を受ける学校是聖書を教科としキリストを教師と仰ぐ学校なり」^{注(35)}

ウォールター・W・クライダーは、米国メソジスト教会から派遣された宣教師で、特に沖縄キリスト教学院の創設の為に財政的側面から大きな貢献をした人物である。クライダーは曾って青山学院でも教鞭を取ったことがあり、沖縄でのキリスト教学校の設立に幻と意欲を持っていた。以前クライダーは既に牧師

を隠退して材木商を営んでいたが、夫人を亡くし単身で沖縄へ宣教師として赴任したのである。

クリスチャン・スクールの設立に意欲的だったクライダーは、校舎建築の初穂として1万弗をばんと献げ、自ら米国の3教派(メソジスト教会、ディサイプルス教会、福音改革派教会)に当たってそれぞれ1万弗献金の約束を取り付けた。彼の意欲と情熱にはアメリカの諸教会も心動かされたであろう。海外で宣教師としての奉仕をする最後のチャンスだっただけに、クライダーはキリストの名を冠する学校の設立に、宣教師としての最後の人生を賭けていたと思われる。彼は講壇の人と言うよりは、世話好きで客の案内や訪問など良くやり、しかも一旦定めた目標は貫徹する意志の強い人で、縁の下の力持ち的存在だったのである。

キリスト教学校での教育の経験を生かしつつ、学生のキリスト教教育と学校運営に大きな足跡を残したのが前田伊都子宣教師である。前田は牧師の資格を持ちながら曾って恵泉女学院で教鞭を取り、その後米国で宗教教育修士号を取得し、アメリカのディサイプルス・オヴ・クライスト教会から宣教師として沖縄に派遣され、沖縄キリスト教短期大学で個性豊かな教育を行ったのである。前田教授のニック・ネームはニコガミ先生であった。にこにこしながら、がみがみものを言う教師だったのである。前田に泣かされながら大いに成長した学生達が輩出したのである。知的訓練だけでなく、彼らは日常の挨拶や言葉遣い、エチケットまで前田の人間教育を受けた。前田は教育活動の外に、学校の運営・対外的交渉、教会での礼拝説教、婦人会の指導、琉米関係の働きなど、様々な役割を担ったスーパースター見たいな存在だった。

IV 建学の精神

私立学校にとって建学の精神は、その『独自性』(「私立学校法第1条」)であると共に生命なのである。建学の精神は、教育の目標であると共にその根拠でもある。私学がそれに拠って立っている建学の精神とは、凡ゆる教育の営みがそこから出発しそこへ戻って行

く原点なのである。総ての私立学校は、各々独自の建学の精神・教育の理念を持っている。建学の精神の存在の可否について論ずる事は出来ないが、学校の在り方や教育の営みは、建学の精神に従って日常的に検証され、正されなければならない。

沖縄キリスト教短期大学の建学の精神は、『キリスト教精神』であり、それによって学生の知的発達と人格形成の教育的営みがなされる。学則第1条に謳われている建学の精神は、学院設立時代の『目的』を今日的に整備したものである。

沖縄キリスト教学院設立の目的は次の通りである。「本学院はキリスト教の精神に基づいて広く一般学術を修得し、更にキリスト教の専門的知識を究め個人的人格完成並に社会に有用な人物を養成することを目的とする」^{注(36)}この目的が、如何程の神学的・教育哲学的論議を踏まえた上で作成されたかについては、議論のあるところである。しかし目指すところは明確である。これから内容に少し立ち入って検討して見たい。

1. 『キリスト教精神に基づいて広く

一般学術を修得し』

何故『キリスト教』とか『キリストの福音』とせず、『キリスト教精神』としたのか。同学院が、福音宣教・キリスト教布教を第一の目的とする教会ではなくて、教育を直接目的とする学校だからだと思われる。宣教においては伝道と教育とは深い関わりを持っている。けれども学校が直接担っている使命は、人間を育てること、即ち教育である。キリストの福音に基づきながら、信仰告白への導入を直接目的とする事なく、若い命を育てるのである。しかもキリストに在る人格形成を祈り求めつつ、教育の営みを続けて行く。

広辞苑によると、『精神』と言う日本語は、こころ、たましい以外に理念、主義、目的の意味がある。従って『キリスト教精神』とは、キリスト教によって形成された理念・主義の意味を含むと解釈される故に、単に個人的な『こころ』の領域を越えて、学校と言う公的教育機関・組織を支える『精神』であると理解

出来る。そして大学共同体の構成員によって、キリスト教精神は教育活動の中で担われて行くものである。ノン・クリスチャンはそれへの賛同と協力を惜しんではならない。

では『キリスト教精神に基づいて広く一般学術を修得し』とはどう言うことなのか。ここでは極めて重要なしかも困難な課題、即ち信仰と学問との関係が問われる。

文学、人類学、経済学、心理学等の一般の学問に於いては、宗教は排除され視野に入ってきた。学問の性格上それは当然のことである。神学者パウル・ティリッヒの組織神学は、人間の実存を問いとし、神的出来事を答えとして相関関係の神学体系を樹立する故に、哲学を神学の中に組み込んで行く。^{注(37)}それが神学的に成功したかどうかの評価は扱って措き、ティリッヒが興味深い問題提起をしている点は注目に値する。更に彼は「宗教は文化の実体で、文化は宗教の形式である」^{注(38)}と言って、宗教と文化の深い結合関係を述べている。

神学と他の諸学問とを関連づける事は可能であろうが、一つの学問体系の中に組織化することは不可能である。しかし学問が専門化細分化して近い専門分野でも理解し難い状況を呈している今日、学際的志向・総合科目の必要性が求められて来ている。

とは言え筆者は神学と他の学問との安易な結合を提唱しようとは思わない。今日の諸学問は、或る事象現象の特定の分野に限定される。他の分野は見えて来ない。特定の事象現象の特質・構造・機能・発生発達等を観察検証して理論化体系化する。人間に関する研究も様々な角度からアプローチがなされ、人間存在全体は一つの視点では把握出来ない。それは近代の学問の宿命なのである。

キリスト教或は神学は、生命現象や歴史・経済・社会現象の一側面を捉え、それを意味付け体系化するものではない。人間に関して言えば、神学は人間存在の意味目的や根拠を問うものである。それは神と人間、人間と人間、人間と自然との関係を問う。真に生きること(救い)、共に生きる問題を問うのが神学の最大の課題なのである。

経験科学は伝統的に没価値的性格を付与さ

れて来た。しかし核兵器や自然破壊・環境汚染が地球的課題としてクローズ・アップされて来た今日、人間としての科学者は、従来哲学や倫理宗教の対象であった生きる問題・生命の価値観を避けて通れなくなったのである。こうして科学と倫理・宗教との対話が至上命令となって来た。

大学は社会に奉仕する使命を担っている故に、学問の成果としての新しい情報や技術を社会に提供する。しかし単に生きる手段としての社会のニーズに応える大学に止どまってはならない。大学は社会に対して精神的指導性の役割をも担わせられているのである。ここにキリスト教大学の使命が存在すると思うのである。大須賀潔の「学問がキリスト教の実存の確かさのうちに主体化されるとき、大学は自己の存在の超越的根拠を持つことになって、社会の欲望に奉仕するのではなく、社会に、真理の根源から生きる途を指示するものとなるのである」、^{注(39)}との言葉は示唆に富んでいるのである。

真理探求と言う学問の自律的・自己目的的存在り方から、社会への奉仕と言う実利的側面を前面に打ち出すようになったのが現在の大学の特色だと言える。その様な状況だからこそ大学は、社会が、人類が共に生きる為の方向性を指し示す意味で、根源的に仕える大学とならなければならない。キリスト教大学の理念が問われると共に、その存在理由が益々重要になって来る所以なのである。

2. 『更にキリスト教の専門的知識を究め』

ここでは一般学術の上に『キリスト教の専門的知識を究め』と謳われているように、学問としてのキリスト教が最終目標とされている。キリスト教科目だけを専門科目として設置して発足した当時の、『沖縄キリスト教学院』の目標としては明確であり、良く理解出来る。しかしこれは神学的・哲学的検討の不充分さを覗かせるものである。何故ならキリスト教は、凡ゆる学問及び人格形成の基礎と目標に置かれるべきもので、『キリスト教の専門的知識を究め』となると、それは柱としての建学の精神と言うよりは一専門分野になってしまうからである。キリスト教を学問的に究める

ことは、キリスト教神学専攻の学生について言える事であって、英語や保育専攻の学生には当てはまらないのである。

従って、特定の専門分野を建学の精神に掲げることは妥当でないと見えよう。建学の精神は教育の理念として根底に据え、目標に掲げられるべきもので、凡ゆる教育活動を支える普遍的原理なのである。ここには条文改正の必要性がある。

一国の憲法を改正する事が重大な事柄であるように、学校の建学の精神を変更することは重大なる事柄である。しかし条文の改正は理念の改変ではなく、如何なく時代的変遷や状況の変化にも対応できる普遍的原理としての建学の精神の明文化に外ならない。これは建学の精神の変更ではなく、建学の精神をより明瞭的確に条文化する作業なのである。この事は理事会の課題であると共に、教学の責任を担っている教授会の課題なのである。

3. 『個人の人格完成並に社会に有用な人物を養成することを目的とする』

ここには個人と社会を視野に入れた複眼的教育理念がある。個人と社会、私と隣人の複眼をもって生きるのがキリスト者であり、健全な市民なのである。単眼だと立体感を失い、人間と社会の全体像が把握出来なくなる。

キリスト教精神に基づく教育が人格形成の営みをする事は論を俟つまでもない。しかし『人格の完成』と謳うと無理があるのではないか。人格の完成は生涯掛けて行われるもので、大学は人格完成の場ではないのである。キリスト者であると言う事が、一生キリスト者になる課題を抱えているのと恰度同じである。『人格完成』と言う言葉から、キリスト教精神による知的訓練と人格形成をやろうとする開学当初の意気込みは充分伝わって来るけれども、『人格完成』は短期戦では不可能なのである。

仲里が敗戦直後構想したキリスト教大学は、キリスト教の知識を与える大学よりは、キリストによって教育され人格が形成される『キリスト大学』であった。^{注(40)}従って、「キリスト教精神に基づく教育・人格形成」と言う場合、単にキリスト教的感化や雰囲気を超えた、キ

リストの命が通う教育が考えられているのである。しかし学生増と大学の大衆化現象によって設立当初の理念が貫き難くなるのが、現在の大学の宿命みたいなものである。従ってキリスト教大学に於ける人格形成は、知識技術の伝達よりも困難なそして永続的課題なのである。

『キリスト教精神に基づく人格形成』とはどう言うことなのか。大学が学生の信仰への導入を第一義的に考えない教育機関であると言うことは、教会と異なる点である。しかし教育の営みに於いて重要な点は、人間(学生)が様々な媒体を通して変容を遂げて成長することである。キリスト教精神に基づく教育による変容とは、教育の真の主体者たるキリストの導きと助けによるものである。そう言う意味でキリスト教学校の教育は、単なる知的教育に終わらないのである。

教会の人を信仰告白へ導く伝道の働きと大学の学生をキリスト教精神で教育する業とは、同じキリストの宣教の働きであり、人造りなのである。キリストに在る人造りとは、キリスト教的思想や考え方を注入された人間の養成ではなくて、真に人間を形成する事である。ボンヘッファーはいみじくも「ちよどイエスが……人間であり給うたように、キリスト者は、宗教的人間と言ったたぐいのもではなく、単純に人間なのだ。」^{注(41)}と述べている。キリスト教大学の使命も隣人・他者と共に真に生きる人間の養成に外ならない。聖書的表現をすれば「地の塩世の光」としての人間を育てることである。

人間であると言うことは、人間＝人の間と言う言葉が示す通り他者と共なる存在を意味する。イエスの生き方は、悩める者、病める者、差別された者、孤独な人、自己を見失い人間が見えなくなった者に目を向け、彼らと共に生きることによって彼らを生かす事であった。福音の光に照らされて世に送り出される者は、イエスに支えられ、イエスの生き方を生きる者でなければならない。

神の意志を体現した神の子イエスは、神から最も隔たった罪人に向かって行った。神の愛は愛を喪失した者、愛される資格の無い者に向かう。マルティン・ブーバーは「神から

《つかわされた》使命を実現しようとする者は、一見して神から隔たっているように見えながら、じつは、神に帰依するこの世界の運動に属しているのである。」^{注(42)}と述べている。神から世界に派遣される遠心運動は、血液が心臓から動脈を通過して体の各部分に送り込まれる様なものである。そして血液が静脈を通過して心臓に送り込まれて浄化されるように、人間には神に向かう求心運動があるのである。しかし神にのみ帰ろうとする者は、実は神にしっかりと結び付いていないのである。神に捉えられた者は、キリストと共に世に向かって行く。

従って『社会に有用な人物』として送り込まれるとは、単に社会の一員として仕え、社会のニーズに応えるだけでなく、キリストから派遣された者として「地の塩世の光」の使命を果たす事が要求される。キリスト教学校でそのような事が果たして可能かどうかについては、色々疑問もあろう。しかし不可能ではあってもそれはキリストの我々への委託であると共に、我々が目指す目標としなければならない。

4. 『沖縄キリスト教学院』

『沖縄キリスト教学院』の『設立の理由』には『沖縄』に対するこだわりがある様に読み取れる。「曾って太平洋の孤児と呼ばれた沖縄」、「複雑にして矛盾の多い現在の沖縄」、「われらは新しい沖縄の建設に直面して」等の文面から判断しても、『沖縄』が強調されているように思われる。名は体を現す故に名称は重要である。

果たして同学院の創設者は『沖縄』にこだわったのだろうか。敗戦直後の仲里の日記から『沖縄人』の自覚・誇りのようなものを読み取る事が出来る。宜野座の校長時代の日記に、『教育の目標』と言う見出しで『大沖縄人の養成』について「大沖縄人の誕生は教育者の任務 俗人・俗社会との戦争も厭わず 安価なる妥協は絶対禁物 教育の根本は愛有るのみ」、と沖縄人による沖縄人の教育の本分を述べている。^{注(43)}『琉球』と言う名称が差別のイメージが強かった仲里には『沖縄』が当然のように用いられたであろう。ここには『沖縄』

へのこだわりがあるのである。

米国軍政府は、占領当初から沖縄を日本本土から分離して統治する政策を堅持した。一王国であった琉球・差別された琉球の過去の歴史を沖縄の分離統治の根拠にした。従って、米軍は沖縄よりも『琉球』の名称を政策的に使用するようになったのである。「過渡期的様相が終わりをつげ、『沖縄』から『琉球』にびたりと変わるのは、1946年7月1日、この地の統治責任が、海軍から陸軍に移された日をもってである」。^{注(44)}そして公的諸機関は、「琉球列島米国民政府・琉球政府・琉球大学・琉球文化会館をはじめとして、すべて『琉球』の名を冠すること」^{注(45)}となったのである。

米軍のチャプレンやクリスチャンとの交流を持っていた沖縄の教会(教団)が、新しく設立した学校の名称を『琉球キリスト教学院』にせず敢えて『沖縄キリスト教学院』にしたことは興味深い。或は1957年と言えば祖国復帰運動が盛んになった1960年代の前段階で、本土との交流や留学制度も既に設けられていた時だった為に、『沖縄』をキリスト教学校の名称に冠したのは自然だったとも思われる。

何れにしても沖縄キリスト教団が設立したキリスト教学校は、曾っての独立王国で差別の歴史を持った『琉球』ではなく、悲惨な戦禍を被った島『沖縄』の名称が冠せられたのである。これは何の変哲もないようだけれども、極めて深い意義を秘めているのである。

『沖縄キリスト教学院』(後に『沖縄キリスト教学院短期大学』、『沖縄キリスト教短期大学』に改称)は、外の何処でもなく、平和な王国と差別の歴史を担い、ユニークな伝統文化を誇り、去る大戦で地上戦の惨劇を被り、戦後は軍事基地の重荷を背負わされて来たこの地沖縄に立てられ、将来も立ち続けるであろう。沖縄キリスト教短期大学は、沖縄に存在し続けるかぎり『沖縄』にこだわり続けるのである。『沖縄』は自らの存在理由であると共にアイデンティティーをも示すからである。そして『沖縄キリスト教短期大学』の『沖縄』は、沖縄に関わり沖縄の課題を自らの課題として担うことをも意味するのである。

また自らの殻に閉じこもっているのは自分が

見えて来ないと言うことも事実なのである。他者と出会う事によって自分が見えて来る。沖縄キリスト教短期大学は、アジア諸国との学問的・文化的交流を持ちつつ、国際社会に於ける自らの在り方を探り求めて行くべきである。

太平洋の軍事的キー・ストーンであり続けた沖縄を平和の要石にするのは我々の課題なのである。学院設立募集要項に謳われた「複雑にして矛盾の多い現在の沖縄を国際的平和の島にするには是非ともキリスト教文化が基礎をなさねばならぬ」との文言は、現在も沖縄キリスト教短期大学の教育の目標であり、平和は人類共通の課題なのである。

注

- 1) C.NAKAZATO “NOTEBOOK” 1945 参照.
- 2) 日本キリスト教団沖縄教区編『27度線の南から』1971. pp. 132,133.
仲里朝章『恵の光』1948. p. 28 参照.
- 3) 仲里朝章『靈感魂闘録』1946. p. 212 参照.
- 4) 『ゴスペル』新春号(1950). pp. 27, 28.
- 5) 比嘉善雄『わたしの戦後秘話』1978. p. 353.
- 6) 仲里朝章『日誌』 p. 3.
- 7) 同誌 p. 23.
- 8) 比嘉前掲書 pp. 480, 481.
- 9) 仲里前掲誌 pp. 63, 64.
- 10) 同誌 p. 63.
- 11) 同誌 p. 69. 『道標』創刊号(1957) p. 19 参照.
- 12) 同誌 p. 68 ☆の括弧内は筆者挿入(p.17).
- 13) 仲里前掲誌 pp. 76, 77.
- 14) 同誌 p. 78.
- 15) 同誌 p. 81.
- 16) 筆者『日誌』1957・3・18.
- 17) 琉球政府 指令第1号ノ29, 1957・11・12.
- 18) 仲里前掲誌 p. 85 筆者前掲誌1957・3・25.
- 19) 『沖縄タイムス』1957・4・9 夕刊.
- 20) 西俣昭雄『道標』第1号(1958)に「青年と平和」の一文を掲載.
- 21) 同誌 p. 32 参照.
- 22) 中教委指令第46号1959・3・3. 沖縄県中央教育委員会編『沖縄の戦後教育史』資料編 p. 636 参照.
- 23) 『沖縄キリスト教短期大学設置認可申請書』

- (1959・3・3) 参照.
- 24) 『沖縄キリスト教学院短期大学季報』(学生新聞)1961・1・13号.
 - 25) 1960年度『沖縄キリスト教学院学生募集要項』.
 - 26) 前掲新聞参照.
 - 27) 前掲新聞 1961・12・30号.
 - 28) 中教委指令第94号 1963・3・28.
 - 29) 前掲新聞 1963・5・31号.
 - 30) 同前.
 - 31) 比嘉前掲書 pp. 479, 480 参照. 『土地交換契約書』-教団926坪、琉大1583坪.
 - 32) 前掲新聞 1961・12・30号参照.
 - 33) 『道標』1962・10号参照.
 - 34) 仲里朝章『恵の光』1948 p. 28.
 - 35) 仲里『靈感魂闘録』1948 p. 212.
 - 36) 『沖縄基督学院生徒募集要項』より.
 - 37) PAUL TILLICH, *SYSTEMATIC THEOLOGY* 1 (1951) pp. 18~28.
 - 38) PAUL TILLICH, *THEOLOGY OF CULTURE* (1959) p. 42.
 - 39) 宮本武之助編『大学と人間』1961 p. 74.
 - 40) 仲里前掲書 p. 212.
 - 41) ポンヘッファー『抵抗と信従』1970 p. 260.
 - 42) ブーバー『我と汝・対話』1980 p. 146.
 - 43) 仲里朝章『日々の足跡』1946・2・9.
 - 44) 鹿野政直『戦後沖縄の思想像』1987 p. 57.
 - 45) 同前.

参考文献・資料

1. 文献

- 比嘉善雄『わたしの戦後秘話』文教図書 1978.
- 日本キリスト教団沖縄教区編『27度線の南から』日本キリスト教団出版局 1971.
- 沖縄県中央教育委員会編『沖縄の戦後教育史』資料編 1978.
- 鹿野政直『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社 1987.
- 宮本武之助編『大学と人間』日本YMCA同盟出版部 1961.
- ブーバー, マルティン. 『我と汝・対話』岩波文庫 1980.
- ボンヘッファー, ディートリッヒ. 『抵抗と信従』新教出版社 1970.

TILLICH, PAUL. *SYSTEMATIC THEOLOGY* VOL. I: THE UNIV OF CHICAGO PRESS, 1951.

TILLICH, PAUL. *THEOLOGY OF CULTURE* • OXFORD UNIV. PRESS, 1959.

石川政秀編『仲里朝章遺稿集・伝記』仲里朝章顕彰会 1974.

2. 雑誌

『道標』(沖縄キリスト教団発行)創刊号(1957)、10月号(1962)。

『ゴスペル』(与那城勇編集発行)新春号(1950)。

3. 日誌等

NAKAZATO NOTE BOOK 1945.

仲里朝章『日誌』1956~1958.

仲里朝章『靈感魂闘録』1946.

仲里朝章『日々の足跡』1946.

仲里朝章『恵の光』1948.

4. 新聞

『沖縄キリスト教学院短期大学季報』(学生新聞) 1961・1・13日号、同12・30日号、1963・5・31日号.

5. その他

『沖縄キリスト教学院設置認可申請書』1957・10・19.

『沖縄基督教学院短期大学設置認可申請書』1959・3・3.

※『沖縄キリスト教短期大学紀要』第17号(創立30周年記念号)より転載・編集。